

本がひとりでも多くの人々に読まれることを願ってやまない。本書の内容については、私には言いたいことが沢山ある、非常に重大なことで、不注意な誤

りと。しかし、それらを具体的に書くことは、ここでは遠慮しておく。

(評者は経済学者)

三省堂 二二〇〇円

田口 富久治著

『現代資本主義国家』

——マルクス主義的一接近——

疎外国家論貫く

評者 加藤 哲郎
政治学の理論世界は、いま「国家論の復権」のさなかにあ

る。つい最近刊行された日本政治学会年報八一年版は「現代国家の位相と理論」(岩波書店)であり、昨年のアメリカ政治学

会年次大会で初めて設けられた共通テーマ「国家」であった。そして、この八一年アメリカ政治学会大会でのC・リンドブルムの会長演説では、アメリカ多元主義理論の混迷に比しての「ヨーロッパ政治理論の最近の発展」が言及されたが、このヨーロッパ政治学の再生に寄与した「ラディカルズ」として名を挙げられたのは、J・ヘバーマス、N・ブーランツァス、R・ミリバンド、C・オンラン、J・オコンナーら西欧「マルクス主義国家論ルネサンス」を主導したネオ・マルクスたちであった。政治過程論や政治行動論が支配的で久しく「国家論なき政治学」といわれてきたアメリカ政治学においても、国家論の

重要性と七〇年代「マルクス主義国家論ルネサンス」の衝撃が認められつつあるのである。田口富久治氏の新著『現代資本主義国家』は、ミリバンド・ブーランツァス論争にはじまる「マルクス主義国家論ルネサンス」にいち早く注目しわが国に紹介してきた著者による「七〇年以降の研究の一応の総決算」である。前著『マルクス主義国家論の新展開』(青木書店、七九年)は各国理論動向の紹介が中心であったが、本書では、第一部「理論」でマルクス、エンゲルスにさかのぼっての理論史的整理と「ルネサンス」の評価がおこなわれ、第二部「現状分析」では「ルネサンス」から獲得した新しい視角による著者自

ら、我々はICやマイコンを応用した急速な科学技術革新の渦の中にいる。すでに人間以上の複雑な作業をするロボット

今、我々はICやマイコンを応用した急速な科学技術革新の渦の中にいる。すでに人間以上の複雑な作業をするロボット

下田博次

メカトロニクス革命

★知能機械新時代の現場から

「エコノミスト」

「エコノミスト」

「エコノミスト」

「エコノミスト」

通信革命と

電電公社

国民の通信路を守り「通信革命」の旗手を自認する電電公社が果たすべき使命は何？ 巨大企業の現状と未来の展望

電電公社 東京千代田区一ツ橋1-1 電話東京4-56534

現実的分析にも新視角

無倫、資本主義国家の現実的分析にあたっては、殊外国家論的「一般の本質規定」に留まらず、「より具体的な階級の本質規定」階級国家論的視角も用意されている。このレベルでも著者は、伝統的マルクス主義の「道具主義的アプローチ」にはくみせず、ブーランツァスらの「政治社会的アプローチ」とJ・ヒルシュらの「政治経済学的アプローチ」を統合した「資本の蓄積過程—階級闘争—国家の構造と機能（政策）の相互連関」の視角を提唱する。

ただしポスト・ブーランツァス段階でB・ジェソップらの提起する非階級的・非経済的「人民民主主義闘争」についての著者の立場は、本書の限りでは必ずしも明瞭ではない。その具体的分析は、アメリカ、イギリス、西ドイツ、フランス、イタリア、そしてわが国の国家構造、政治過程、行政過程、階級闘争、国家危機の比較政治学的解析—先進資本主義国家—介入主義国

家類的特質と各国の種差性の析出—とじて論述される。

今日の国家危機の展開方向として、著者はブーランツァスの「権威主義的国家主義」とウルフラの「ネオ・ゴッポフティズム」に注目しているが、前者についてはジスカールデスタン期フランスに引きつけられたイメージである点に、後者については労働組合運動の体制内化の度合い（わが国の場合は企業内での実質的統合）と関わる点に注意を喚起している。

本書の刊行は、「マルクス主義国家論ルネサンス」の現状分析段階への移行—具体化がわが国でも開始された（日本政治分析への批判的適用—土着化を含む）ことを告げるものである。著者は「人民大衆」の側からの変革方向をも「合意による革命」として示唆しているが、この点は同時に刊行された『多元的社會主義の政治像』（青木書店）で、「前衛党」組織論や「現存する社会主義」批判に視野を広げて論じられている。あわせて参照されるべきであろう。

（著者は一橋大学助教授）
（御茶の水書房 二八〇〇円）

LIBRARYらいびらりいライブラリLIBRARYらいびらりいライブラリLIBRARY

経済見通し

—その予測方法の理論と実際—
（宮島 壮太郎著）

新SNA登場から四年経つが、本書は現在の経済政策の基本的態度を決めるうえで重要な、経済見通しの作り方をやさしく解説している。

経企庁スタッフによる執筆だけに、内容は要領よく、問題の所在の指摘も的確といえる。経済見通しには、時の政府の政策意図が加味されるが、同時に経済実勢と離れて存在することはない。最近では、米国の政策態度が日本経済を大きく揺さぶり、見通しと結果の乖離が大きくなっていく。その意味でも経済見通しのあり方が問われている。

（金融財政事情研究会 二〇〇〇円）

ドイツ民俗紀行

（坂井 洲二著）

ドイツ文化の研究は日本でもこれまでにかなり高水準の蓄積ができていくが、ドイツ人の庶民生活や農村の暮らしぶりとなる紹介も研究もまだまだ十分とはいえないだろう。著者は西ドイツの民俗学に学び、現地で生活し、実地

調査も行い、その成果を悉くに西ドイツの都市や農村での庶民生活を生きたと描き出している。対象も、家族、宗教、住宅、上下水道、防火対策、山村の変化などと多様な項目を取り上げ分析しているが、学術書的な堅苦しさはなく、読みやすい、すぐれたドイツ文化論になっている。

（法政大学出版局 二二〇〇円）

聞き書き 徳川慶喜残照

（遠藤 幸成著）

本書は大政奉還後、静岡に隠遁し、老年に至ってから東京に移り住んだ一五代将軍、徳川慶喜の日常生活の点描である。希代の逸材と期待された慶喜は、幕府倒壊を防ぎえず、若くして政界を退いてからは趣味に明け暮れた。

新しいものに異常な興味を示し、自ら手を染めずにはおかない慶喜の性格は、さまざまエピソードを残している。また、幼児の時から宰相教育により、公の場での威厳と用心深さにまつわる逸話も数多い。たぐい仕えの女性からの聞き書きだけに全体的なまとまりを欠く。

（朝日新聞社 一四〇〇円）